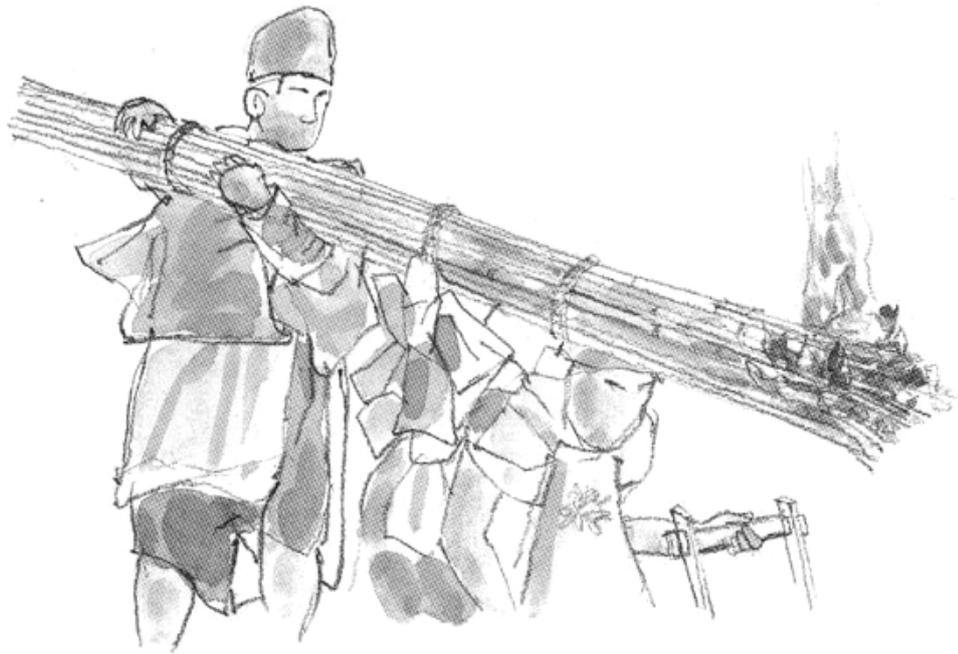


# 響 風

Hibiki Winds



画集「北九州101景」西川 幸夫より

あしや句会

第 2 号

## はじめに

平成十六年五月から始めた九州組の吟行句会は、毎月欠かさず行われるようになり、風雨などの悪天候でも、余程のことが無い限り都合をつけて句会に参加する。おしゃべりや食事を楽しみながら最後は句会で締める。その快い余韻が、吟行記や写真をホームページに載せる原動力になっている。

しかし月々更新していくホームページを振り返って読むことはほとんど無く、年月が経てば忘れ去られるものだから、吟行の足跡を残しておきたい。その思いから昨年は平成十七年十二月の第十五回までの吟行記を「響風 第一号」として小冊子に編集し、今回第二号として平成十八年の一年分をまとめてみた。

この一年の「あしや句会」の活動は、一月の「小倉城」吟行に始まり、「初午」「佐賀のお雑様」の見学、花見やバス旅行など、一人では出来ない吟行句会を楽しむことができた。

また全員ではないが、夏行や杞陽忌句会にも参加。夏行では月心寺の胡麻豆腐を食し、増水した宇治川沿いの宿に泊まるなどして京都・宇治を満喫。杞陽忌では、本井英氏と虚子や杞陽ゆかりの地を訪れるなど、またとない幸運な旅となった。月々の吟行句会の積み重ねが、こうした縁を運んでくれる。

平成十九年はどのような年になるだろうか。

「あしや句会」のメンバーが北九州と福岡地区に離れ住んでいるので、吟行地探しは交互に行い、観光地や神社仏閣などを中心に訪れているが、回数を重ねるほどに吟行地探しに苦慮する。もちろん同じ場所を違う季節に訪れるのもいいが、時には季節の行事などに参加し、句を詠んでみるのも面白い。

句友あつての俳句会を、いろいろな試みで刺激を与え、楽しさの中から納得のいく一句が詠めるような「あしや句会」が続くことを願っている。

平成十九年二月

江本 由紀子

# 響風 第二号 目次

## ■はじめに

## ■吟行記

第十九回	小倉城・八坂神社	1
第二十回	初午・祐徳稻荷神社	3
第二十一回	佐賀城下「ひなまつり」	6
第二十二回	吉祥寺・小屋瀬	9
第二十三回	大宰府天満宮・光明禅寺	11
第二十四回	大村公園・新西海橋・嬉野温泉	14
番外編	博多祇園山笠	17
第二十五回	観世音寺	20
第二十六回	武蔵寺・天拝山山麓	22
第二十七回	中津城・福沢諭吉旧居	25
第二十八回	櫓山荘跡・夜宮公園	28
第二十九回	友泉亭公園・植物園	31
■自薦句		
一〇三	平成十六年十月〜十七年三月	34
四〇六	平成十七年四月〜九月	37
七〇九	平成十七年十月〜十八年三月	40
一〇一三	平成十八年四月〜十一月	43
■あとがき		

吟  
行  
記

(第十九回～第二十九回)

# 第十九回吟行記

平成十八年 一月十二日(木)

参加者 聖子 節子 真理子 光子 由紀子

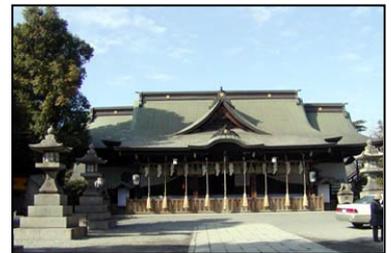
## 小倉城・八坂神社

今年の初句会は、小倉城の横にある「八坂神社」への初詣。



例年になく寒い日々が続いているが、当日は朝から青空が広がり幾分暖かい。西小倉駅から歩いておよそ五分で小倉城に着く。「松本清張記念館」を通り過ぎ、菰の巻かれた松が点在する城内へと入っていく。小倉城周辺は、北九州市庁舎や図書館、博物館などもあり、「勝山公園」として整備され、市民の憩いの場所となっている。松過ぎの城内は人がほとんどいないが、楠の木の下にある横山白虹の句碑や「白洲灯台」の模型をゆっくりみながら城の入口まで歩いて行く。ちょうど防火訓練のための消防車が訓練を終え、帰り仕度をしている。

小倉城は、関が原合戦の功勞で入国した細川忠興によって一六〇二年築城工事が行われ、七年の歳月をかけて造られる。細川氏の熊本転封の後には、小笠原氏が明石より入国する。「唐造り」と呼ばれる城は、冬晴れの空に向かって高くそびえ、野面積みの石垣は豪快かつ美しく城を支えている。門を出て、北の丸跡にある「八坂神社」へと向かう。城の陰に隠れたようにある神社だが、初詣などには多くの参拝客



が訪れるのであろう。この神社は、細川忠興が一七一年に小倉の鎮守として鑄物師町に建て、一九三六年(昭和九年)この地に遷座される。全国三大祇園に数えられる小倉祇園祭りでは、みごとなバチさばきの祇園太鼓が奉納される。境内は広くはないが、ひっそりとお百度石や数え石が置かれ、句碑や歌碑が建立されている。

「風おちてゆふくもなひく街の空 しつかに城はそひえたちたり」  
丸橋 静子  
仰木 実

この歌碑や句碑の建立の経緯は知らないが、暮れゆく小倉の都心にそびえる城を見上げながら同じように思い、お百度石を触りながら、幾人の女性が家族の幸せを願ってお百度を踏んだであろうと思いを馳せる。

楼門より出て城濠を渡ると、二〇〇三年再開発事業の一環として造られた「リバーウォーク北九州」のユニークな建物が、そびえている。曲線や円形を多用したデザインは、福岡の「キヤナルシテイ」と同じイタリアのデザイナーによるものだ。日本古来の城の横に、全く異質の建物が建つことには賛否両論があったが、見慣れてくると違和感は薄れ、北九州の新しい顔になっている。横を流れる紫川の対岸にある「聘





珍楼（へいちんろう）にて昼食。護岸工事によつて以前のドブ川から噴水の上がる市民の楽しめる川へと変わった紫川。そこに架かる「鷗外橋」を渡つて、また小倉城へと吟行に行く。

紫川には多くの橋が架けられているが、「鷗外橋」は歩行者専用橋で、中央には「鷗」という名前で、澄んだ青空に向かって白い鳥を追う少年の彫刻が設置されている。（少女の像

と思つていたが・・・）橋を渡りきつた所に、明治三十二年陸軍の軍医部長として小倉に赴任してきた鷗外の作家としての偉業を讃えた「森鷗外の碑」が生誕百年を記念して建てられている。小倉を舞台にした小説「独身」「鷄」や小倉在任中に書かれた日記「小倉日記」からの引用文が刻まれている。

夜はイルミネーションで輝く川の辺には、対岸のデパートや商店街に行く人や、公園を散策する人、鷗などの鳥に餌をやりながら日向ぼこをしている老人などがベンチに座っている。「小倉城庭園」や城内で句作する。句会は同じ城内の北九州市庁舎十五階にあるレストランにて行う。レストランの窓からは小倉の街が一望できる。

ビル街の中に冬日の小倉城  
 聖子  
 楠の実のひと粒づつにある冬日  
 真理子  
 境内をぬければ冬日中の城  
 節子  
 水底の藻の浮かび来し冬の晴れ  
 光子  
 冬晴れや鷗外橋に鷗群れ  
 由紀子



横山白虹の句碑



かぞえ石のついた  
 「百度石」



森鷗外記念碑



小倉城天守閣



小倉城庭園

# 第二十回吟行記

平成十八年 二月十日（金）

参加者 聖子 節子 光子 由紀子 真理子  
初午・祐徳稲荷神社

二月は「中津のお雛様祭り」を計画していたが日程が合わず、兼題が「初午」ということもあって、いつもの第三木曜日を変更して初午の日の二月十日（金）に吟行する。「初午」とは、二月最初の午の日。七十二年の初午の日に稲荷大神が京都伏見の稲荷山に降臨した日で、いわばお稲荷さんの誕生日。稲荷信仰は江戸時代に最も盛んで、稲荷神社の他に武家屋敷、町家の裏庭、長屋などにも守り神としていたるところに祠があり、初午の日はお祭りとして大いに賑わったという。

今回、「初午」の吟行場所は「祐徳稲荷神社」。佐賀県鹿島市にあるこの神社は、日本三大稲荷のひとつといわれている。日本三大というのは曖昧なもので、京都の伏見稲荷は別格として、愛知の豊川稲荷、茨城の笠間稲荷、岡山の最上稲荷など名前があがってはつきりしないが、九州では一番名の知れた稲荷神社である。参拝客は年間二五〇万とも三〇〇万人ともいわれ、太宰府天満宮について多い神社である。

当日光子さんと快速で折尾駅から博多へ。博多から特急「かもめ」に乗り換え真理子さんと合流する。鳥栖駅から聖子・節子さんが乗り込む。ほぼ満席の特急は鳥栖から長崎本線へと入り、肥前鹿島駅に降りる。小さな駅舎は特急が停まるとは思えないほどだが、「祐徳稲荷」の参



こで降りる。広い駐車場の先には参道があり、両側にはお土産店が軒を連ねている。

この日は「初午」ということもあって観光バスも止まり、参道は参拝客と客を呼び込むお店の人の掛声で賑わっている。参道の中ほどにある「家督屋」というお土産店の奥で昼食をとる。豊敷きの大広間に長テーブルを縦長に並べて団体客に対応できるようになっている。「だご汁」と「お稲荷」を美味しくいただく。

赤い大鳥居をくぐって境内へと入ると、狛犬ではなく狐の像が置かれ、神池、楼門へと続く。目の前に広がる社殿は極彩色の宏壮華麗なもので、目を疑うほど見事なものだ。この稲荷神社は一六八七年創建されたもので、肥前鹿島藩主鍋島直朝氏の夫人・萬子（天皇の曾孫で左大臣花山院の娘）が鍋島家に嫁ぐ際、朝廷の勅願所であった稲荷神社の分霊を奉祀したものという。現在も耕作、漁業、商業（衣食住）の守護神として、商売繁盛、家運繁栄を祈願する人が絶えない。





鍋島家の尊信が篤く藩費で造営されただけあって、「鎮西日光」と称されるほど豪華絢爛な造りだ。ほとんど総漆塗りで、楼門の左右には鮮やかな有田焼で作られた武者人形(?)が置かれ、奥の「御神楽殿」も赤色を基調に極彩色の彫物や絵が施されている。「御本殿」は山の傾斜を利用した京都の清水寺に似た舞台造りで、朱塗りの支柱が異彩を放っている。お神酒をいただいでから、高々とある本殿へと昇っ

ていく。天井には極楽浄土のように花や鳥(鳳凰だろうか)がえがかれている。あまりの豪華さに、お参りしたものの真正面の御祭神をよく見えない。

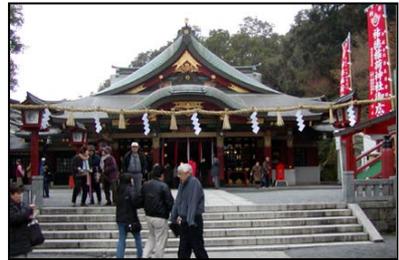
#### 御祭神

倉稻魂大神(ウガノミタマノオオカミ)・・・稲荷大神と呼称され、衣食住の守護神

大宮売大神(オオミヤメノオオカミ)・・・アメノウズメノミコトとも呼ばれ技芸上達の神、福徳円満の神

猿田彦大神(サルタヒコノオオカミ)・・・水先案内の神、交通安全の神

本殿の裏手の山には末社があり、稲荷神社特有のトンネルのように並べられた赤い鳥居をくぐって登る。その中の「命婦社」(みようぶしや)は稲荷大神のお使いである白狐の霊をお祀りしている社で、社の木彫り技法も価値が高く、県の重要文化財になっている。近くには花山院萬子媛(のちの祐徳院)が祀られている「石壁社」があり、彼女が吉凶を占っていたとされる「水鏡」も置かれている。このまま登れば「奥の院」があるらし



いが、下の境内で「平戸神楽」など伝統芸能が舞台で奉納されているので引き返し階段を下りていく。この近くには嬉野温泉や武雄温泉があるので、芸者姿の女(男?)の人もいる。神楽奉納が終わると、その芸妓たちが舞台上がり舞う。嬉野茶摘踊りなるものも奉納され、茶摘みの籠から飴などのお菓子 がばら撒かれる。前列に陣取った甲斐あつて手いっぱい拾う。

楼門から出て休憩所に行くと、その先には庭園があり、梅や寒ボタンが咲いている。境内ではまだまだ奉納芸能が続いており、出番を待つ鬼の面をつけた人たちが行き来している。佐賀県を代表する民俗芸能「面浮立」(めんぶりゅう)の踊り手らしい。話しかけると鬼の面を取って見せてくれる。まだ待ち時間があるらしく、その踊りを見ることはできなかったが、迫力ある鬼の面を間近に見せていただく。

句会では参道の喫茶店で行う。午後二時をすぎると参道を歩く人も少なくなり、喫茶店の中も客がいらない。奥のテーブルではお店の従業員三〜四人が何かお土産品を詰めていたのか、おしゃべりしながら手作業をしている。私たちにもゆつくりしてもいいと言う。句会を終えた頃には、参道はさらに人が少なくなり、お昼の賑わいが



うそのように静かだ。両側に植えられている桜の硬い芽にまだまだ春の浅いことを知る。佐賀のお土産にと嬉野茶などを買って、待合所で帰りのバスを待つ。思いがけず切符売り場のおばさんが皆に熱いコーヒーを入れてくれる。紙コップなどではなく陶器のカップだ。冷えてきた体には有難く美味しい。

初めての祐徳稻荷神社の参拝は、社殿の絢爛さに驚き、茶摘踊りの飴撒きに笑い、人の温みに接して終える。寒い時期にもかかわらず、皆がスムーズに動くことができるようにと下見をさせていただいたお二人に感謝。

有明の干潟に近く午祭  
傘捜す間に降り止みし春時雨  
節子 節子

湯の町の芸妓らも来て午祭り  
天井にえがく極楽春時雨  
由紀子 由紀子

うちつづく鳥居に春の雨の降る  
獅子舞も平戸神楽も午祭  
光子 光子

清水を模したる神社春時雨  
位命婦白狐の社山椿  
聖子 聖子

一山に日差し戻りし初午祭  
朱の鳥居くぐる間に間に春時雨  
真理子 真理子



舞台造りの「祐徳稻荷神社」本殿

## 第二十一回吟行記

平成十八年 三月十六日(木)

参加者 聖子 光子 真理子 由紀子

### 佐賀城下「ひなまつり」(佐賀市)

二月の吟行地・祐徳稲荷の帰りに、三月は「お雛祭り」に行こうということになった。日田(大分県)や柳川(福岡県)の「雛祭り」は毎年多くの観光客でにぎわっているが、佐賀市でも「お雛祭り」が催されているという。祐徳稲荷のある肥前鹿島より博多寄りなので時間的にも無理がない。節子さん、聖子さんは時々用事で佐賀市には来ているようだが、光子さん、由紀子をはじめなので二つ返事で承諾する。

佐賀市はもちろん佐賀県の県庁所在地なのだが、不思議なくらい観光地としての知名度はない。有田や唐津、嬉野、吉野ヶ里と個々の地名を言ったほうが分かりやすく、「そうか、有田は佐賀県にあるのか」といった具合で、佐賀市から浮かんてくるものがない。だが三十六万石の城下町として栄え、古伊万里、柿右衛門様式、色鍋島などの磁器やきらびやかな佐賀錦などの伝統工芸が受け継がれている佐賀藩鍋島家の「お雛さま」を見るのは楽しみだ。



今回節子さんが風邪のため欠席となり残念だが、四人で佐賀駅からタクシーで雛まつり会場へと行く。生憎の雨となったが会場の駐車場は混んでをり、最初の会場「徴古館」(ちようこかん)には次々と見学者が入っていく。ここは元々佐賀藩鍋島家伝来の御道具類や古

文書等が收藏されているところで、薄暗い館内には幕末から近代にかけての鍋島家十一代〜十三代の夫人の雛調度が部屋いっぱい展示されている。豪華な雛調度には其々お印がついており、ミニチュアのお琴や三味線には弦がきちんと張られるなど皆精巧な作りである。今年は徳川家から興入れした十代夫人の「葵御紋付御所人形」が三年ぶりに公開ということ、正面に展示されている。そして奥の展示台にはボンボンニールがたくさん飾られている。中にはいくつか金平糖もはいつている。



「徴古館」から「佐賀市歴史民俗館」といわれる佐賀の古い屋敷の残っている通りへと歩いていく。散策ルートである川沿いの木々は少しづつではあるが芽吹きはじめ、整備された岸には菖蒲の芽が伸びている。所々に置かれている寝そべった河童の像が愛くるしい。古い看板を掲げた写真館などを写真に収めながらいくと、鍋島藩祖を祀っている「松原神社」が見えてくる。その神社からまっすぐのびた門前通りに今日の食事処「松川屋」がある。江戸末期から続く老舗宿らしく、森鴎外の投宿(小倉日記に記述)や映画「張り込み」ロケのスタッフの宿泊所になったり、映画関係者とのご縁など話題に事欠かないお店である。ここで「お雛御膳」をいただいから、近くのお雛様会場の「旧福田家」へと足をのばす。

この屋敷は実業家の福田氏が大正七年に建てた近代和風住宅で、玄関を入ると佐賀錦のお雛様が部屋ごとに飾られていて、実際に佐賀錦を機で織っているところを見せてくれる。特別な和紙に金



箔や銀、漆などを張ったものを細かく裁断したものを縦糸にし、染色した絹糸を横糸として織り込んでいく手作業は根気と精巧な技術がいるものだ。柿渋の独特な匂いがする。

次の雛会場は「旧古賀家」。古賀銀行の創設者、古賀氏が明治十七年に建てた武家屋敷に似た様式の住宅。ここは「鍋島小紋」を纏ったお雛様が「円」をテーマにした飾り方で展示されている。座敷いっ

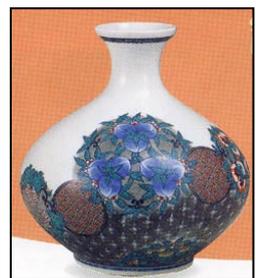
ぱいに飾られた大小のお雛様は愛らしいものばかりだ。「鍋島小紋」は、江戸時代佐賀藩鍋島家が特に使っていた紋様で、「胡麻の殻」の断面を圖案化したものという。明治以降、幻の紋様になっていったものを人形に着せることで佐賀ならではの雛様をつくろうと取り組まれた女性人形作家の努力の賜物だ。ここではお琴の演奏やお茶席も用意されている。別棟のお茶室で、お雛様の掛軸をみながらお抹茶をいただく。



辺りには、まだまだ古い屋敷を利用して展示や催しものがあつたが、そろそろ句作・句会の時間も気になるので、句会場として館内にレストランもある「旧古賀銀行」へと急ぐ。吹き抜けや装飾など貴重な洋風建築の粹を集めた洋館には、一階の正面に「古今雛」が、二階の頭取の部屋には「箱雛」が、他の部屋には和紙の雛人形などが展示されている。「古今雛」の



前には、壺や皿などの「色鍋島」が数多くガラスケースに展示されている。佐賀藩の御用窯として作られた焼き物である色鍋島は、一般には流通せず城内や献上品としてのみつくられたために世界的にも高い評価を得ているが、その伝統を現在まで引き継いでいる歴代の今右衛門の桃の絵の作品と、十四代今泉今右衛門の新作だ。桃の絵は、雛祭り



に因んでのものである。これらを眺めながらの句作・句会にピアノの生演奏が心地良い。



「旧古賀銀行」の「古今雛」は佐賀藩の支藩にあたる小城鍋島家伝来のものと説明があるが、長顔に豪華な冠。「徴古館」で見た雛は丸顔もあり、長顔もあつた。雛人形の起源となっている形代(かたしろ)から紙雛、立ち雛となり、飾って楽しむ座り雛となって現在に至るまで、雛人形にも流行や種類があることを知る。

寛永雛・・・江戸時代前期の最も古い座り雛

享保雛・・・寛永雛の流れで江戸時代中期 庶民向きの町家あたりで

飾られ、能面のような面長の雛

次郎座衛門雛・・・幕府の御用達、雛屋次郎座衛門が作り始めた雛 上流階

級用だったが、庶民向けにも出回る 丸顔

有職雛・・・公家など上流階級が特注で作らせた雛

古今雛・・・江戸で流行した豪華な町雛だが、身分を越えて珍重され

古今様式の京雛もできる写実的な顔で現代の雛人形に引き継がれている

「徴古館」の鍋島家十一代夫人栄子（ながこ）さまのお雛様は有職雛と独特な丸顔の次郎座衛門雛。十三代夫人紀久子さまのお雛様は有職雛。「旧古賀銀行」の古今雛。そして佐賀の伝統工芸に身を包んだ現在のお雛様。時代とともに変遷したお雛様を堪能することができた。



来た時の川沿いの道から中に入ってアーケードの商店街を歩いて大通りまで行く。商店街の靴屋からうどん屋まで至る所に大小のお雛様が飾られ、街全体が「おひなさままつり」で華やかに彩られている。街中の「恵比須ギャラリー」には「お菓子のひなまつり」といって、お菓子の神様である「中嶋神社」（伊万里）を祀り、雛菓子や

佐賀伝統の菓子を展示、販売している目にも口にもやさしい佐賀城下の「おひなさままつり」でした。佐賀駅から特急に乗り、それぞれ家路につく。解散。

雨どいに緑青ふきし雛の宿

光子

丸顔もあり長顔も雛館

由紀子

うどんやのショーウィンドウ雛飾り

聖子

アーケード茶屋も服屋も雛飾り

節子

佐賀錦織る指先の楓の芽

真理子



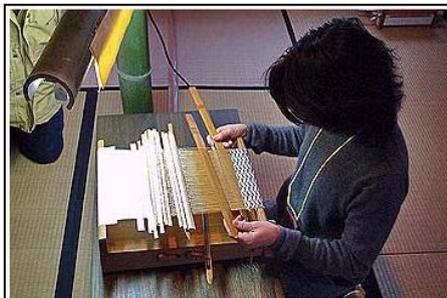
佐賀錦の雛人形



旅庵「松川屋」



松原川



佐賀錦の機織実演



ボンボニエール

## 第二十二回吟行記

平成十八年 四月十三日(木)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子

### 吉祥寺・木屋瀬 (北九州市八幡西区)



三月の句会后、いつも吟行句会は第三木曜日または第二木曜日なので「お花見」ができないという話になった。こういう話には反応のよい「あしや句会」のメンバーはすぐに実行。全員三月末締め切りの句集原稿を書き終えて、三月三十一日、駕与丁(かよいちょう)公園に集合。桜はまだ五七分ではあつたが、天気にも恵まれ、無人駅から畑や田んぼの中を歩いていく道すがらの風景といい、芽吹く木々や広々とした池の周りの風景は予想以上のものだった。桜の木の下で花見酒を飲みながらひと時を過ごす。「俳句を続けていてよかった」と思うのはこういう時だ。鴨の池のほとりでの句会は五句出し。見上げる空は青く、気持ちのよい桜の風の吟行句会となる。

四月の第二木曜日、定例会を北九州で行う。桜の後は「藤」ということで、藤寺で有名な「吉祥寺」を吟行することにする。「吉祥寺町」に住む光子さんの邸宅は、寺まで徒歩一分。家の前を参拝する人たちが行き交う。寺を散策する前に、築九年の光子邸の庭を散策。建設時チューリップなど三〇〇〇個の球根を植え込んだそうだが、その名残の球根は今だに花を咲かせ、趣向を凝らし



た庭は、せせらぎの音を聞きながら多くの庭木や花を楽しむことができる。光子さんと大江健三郎似のご主人の案内で、しばらく見学させていただく。もうここだけで満足の吟行だったが、昼食の時間でもあり、吉祥寺を参拝する前に、車で十分ぐらいの北九州の観光地にもなっている旧長崎街道の宿場町・木屋瀬へと向かう。

創作料理の「沙羅の木」木屋瀬店にて昼食。その後遠賀川沿いにある「長崎街道木屋瀬宿記念館」の駐車場に車を止め、保存された宿場町の町並みを歩く。白壁や木枠の窓が当時の面影を残し、それを大切に残そうとしている人達の思いが伝わってくる。芝居小屋を模した「こやのせ座」から「船庄屋跡」の梅本家、旧高崎家、須賀神社、本陣跡などを回る。長崎街道の宿場町として栄えた木屋瀬は、遠賀川中流の中心地で、江戸時代は五平太船(川ひらた)を使った年貢米の集積場であったらしい。年貢米の輸送は、権利を持った川ひらたに限られ、それらを束ねるのが船庄屋。その船庄屋跡を訪れると、広い土間が奥まで続く江戸時代の商家の造りになっている。玄関(入口)が広々と開いていて、中をのぞくと奥の一部屋に灯りが灯っている。屋内は十一月の「宿場まつり」の時のみ公開されるようで、日頃は外からだけの見学ということらしい。

木屋瀬では、この「船庄屋」梅本家のように「宿場まつり」のみ公開という家は何軒かあり、実際その家で人が生活をしている。梅本家の少し先に一段と大きな白壁の家が見える。この建物は北九





州指定有形文化財になっている旧高崎家。建物の中に入ると、ボランティアの人が案内、説明してくれる。江戸後期の宿場町の商家建物として、また放送作家の伊馬春部（いまはるべ）の生家として常時一般公開されている。工夫された吹き抜け窓、吊り上げ板戸、雨戸の説明を聞きながら、伊馬春部の「向こう三軒両隣」「本日は晴天なり」などの台本や資料などを見る。「記念館」でもらった木屋瀬の案内図を

手にしばらく町を歩く。一巡りして遠賀川沿いの駐車場までくる。川に沿った道の真ん中に大銀杏がそびえている。この付近に船着場があったらしい。船頭たちは、この大銀杏を目印に集まっていたのだろう。

木屋瀬を後にして、また光子邸まで戻り「吉祥寺」へと歩いて行く。

まだ「貝寄風会」の名前も付いていない第三回の吟行地が「吉祥寺」だった。（第四回から「貝寄風会」と名付けられる）手元に当時の御選句が残っている。

香を放ち藤の花房風に揺れ

藤の花ゆればクモの巣もゆれて

藤の風香りたる後房ゆれて

あれから二十年近くが経とうとしているが、吉祥寺の藤は多くの人たちによって守られ、毎年美しい花を咲かせている。変わったといえば、お寺の裏山一帯が公園として整備され、広い藤棚が公園内に作られている。三重の塔の展望台や竹林、紅葉の広場、紫陽花の径などもあり、藤の季節だけではなく楽しめるようになっていく。この日は、まだまだ藤棚の藤は小さな房から紫色が見えている状態で、盛りには一く二メートルも房が揺れ



る藤になるとは想像出来ないほどだ。光子邸にて五句の句会。

後日（二十七日）「藤まつり」の日に再訪すると、境内を埋め尽くす藤はちようど見頃で、境内の句碑「藤棚の下の浄土のこみあへり」（横山 白虹）そのものだった。

一本の桜に宴始まりし

節子

集いては又別れ行く春の暮れ

聖子

草萌えて旧街道の船庄屋

由紀子

紫にほどけはじめし藤の房

光子

築九年蝶のよく来る庭となり

光子

## 第二十三回 吟行記

平成十八年 五月十一日（木）

### 参加者 聖子・節子・光子・真理子・由紀子 太宰府天満宮・光明禅寺

ゴールデンウィーク明けからすつきりしない天気が続いている。五月十一日、雨は上がったが空を覆う雲に折りたたみ傘をバッグに入れて二日市駅に降り立つ。JR二日市駅に集合というだけで行き先はわからない。メーリングで届いた案内に「ミステリアルネサンス句会」と書かれている。節子さん聖子さんならではの小粋なネーミングの吟行に心弾む（何故ルネサンスかがわかり、お二人に拍手）西鉄電車で来ているという真理子さんを途中車に乗せて走るが、さて行き先は？

このあたりはどこを歩いても史跡が多く自然にも恵まれているので吟行する場所に事欠かないが、「今日は雨が降り出しても楽しめるようにと太宰府天満宮界隈を吟行する。」という。天満宮には昨年2月梅見吟行で参拝したが、境内は広くまだまだ見ていない所がある。

本殿裏から入ろうとすると傍に一本の老木。案内板に樹齢七百年の「ちしやの木」と書かれている。幹の中央部分が空洞になり何本もの支柱で支えられながらも柔らかい黄緑色の若葉をたくさんつけている。一步境内に踏み入れると、一面梅の木が青々と葉を茂らせ、その葉下に小さくたわわに実をつけている。本殿に回ると修学旅行なのか制服姿の中学生の集団が参拝したりお御籤をひいたりしている。目を



の新緑の瑞々しさは人間や天満宮の本殿さえも小さく見えるほどだ。

「くすの木千年 さらに今年の若葉なり」 萩原井泉水

（境内に昭和42年建立）

楼門より「曲水の庭」へと周る。毎年行われる「曲水の宴」の舞台。中に入れないので柵より眺める。宴の後の庭は普通の梅林にすぎないが、小流れの川や橋にテレビで見ると曲水の宴の映像が浮かぶ。反対側にある池には菖蒲が点々と植えられている。まだ葉先がツンツンと伸びているのだが、よく管理された菖蒲池は盛りの美しさを想像させる。

これらを見ながら先に進むと、左手に遊園地の看板、右手に「九州国立博物館」への入口。駅舎のようなその入口前では修学旅行生たちがクラス写真を交互に撮っている。立ち去るのを待つて中に入ると、上り下りの長いエスカレーターが動いている。入館料は上りきった博物館の入口だというので、上まで行くことにする。昨年十月開館の博物館は予想以上に来場





者が多く、太宰府近辺の渋滞がニュースになっていた。それが少し収まってからと思っていた北九州組は初めての来館。総ガラス張りの建物は、緑湧き上がる山の中に万緑を映して建っている。東京、京都、奈良に続いて四番目となる国立博物館の建設は、「遠の朝廷」として栄えた太宰府にとって長年の夢だったものだ。ここによりやく実現する。中では「琉球展」が催されているようだが、睡蓮の池や竹林を見てまた下へと戻り、芭蕉ゆかりの「夢塚」や芍薬の径を通って境内を出る。

境内横の「古香庵」にて昼食。古香とは梅のこと、庭には梅の古木が実を散らしている。今は会席料理店となっているが、建物は江戸末期から昭和にかけて、親子二代に亘って名を知られた筑前の書家吉嗣梅仙、排山、鼓山の住居「古香書屋」である。玄関に掛けている「古香書屋」の扁額は名付け親の三条実美卿の書。店内の書や掛け軸、調度品などを見る。明治大正時代の畳敷きの大広間や小部屋、廊下など落ち着いた佇まいの中で食事を頂く。硝子窓から白壁の蔵が若葉の中に見える。

表参道から少し入った「光明禅寺」へと足を運ぶ。天満宮社僧の菩提寺だが、庭の美しきで有名な寺。シーズンには多くの観光客が訪れる。修理中の楼門を潜るとすぐに石庭がある。広くはないが、白砂の箒目の揃った庭に大小の黒っぽい石が配置されている。若葉と相俟ってそのシンプルなコントラストに引きつけられる。十五個の大小の石は「光」という字に配



置されているらしい。受付には誰もいない。拝観料と書かれた箱が置いているだけである。鎌倉時代に創建された堂の中は、装飾などない質実な造りでがらんとした板張り。奥に行く到庭に面して縁側があり、L字

型に畳の部屋と茶室が設けられている。ここは庭で名を馳せているだけあって、白砂と緑の苔と楓の林は目が覚めるほどだ。「一滴海庭」といって海と陸を表現しているらしいが、そういうものが分からなくても、この苔と楓若葉のマイナスイオンたっぷりの庭は爽やかだ。風蘭の花が咲き、裏山からは囀りが聞こえてくる。部屋に高濱年尾の句が掲げられている

石庭の時雨るる時の京に似て 年尾

寺に沿う藍染川。能や和歌に詠まれたこの川にまつわる恋伝説の碑文を見て参道へと戻る。参道には梅ヶ枝餅の店が多く並んでいる。その中の「松屋」に入る。店構えは他の店と比べてほとんど変わりなく外からみると小さいくらいなのだが、店内で食べようと中に入ると、柿若葉の下に緑色の苔が生えている庭があり、テーブルと椅子が並べられている。薄日が差し込んでくる。ここ





も謂れのある店で、京都清水寺の和尚 月照上人が安政の大獄で京都から九州に逃げ、この松屋に泊まったという。庭には月照上人の歌碑も建っている。梅ヶ枝餅が美しく追加注文をする。十句出句。「古香庵」「光明禅寺」「松屋」など京都の雰囲気だったこともあって、年尾句の「京に似て(し)」を使った句を必ず一句出すことにする。

若葉風抜ける石庭京に似し

月照の仮寝の宿の京に似し

夏帽の美女多き町京に似て

広縁の京に似し寺若楓

風通る花楓の道京に似て

句会を終えてこれからはオプシオンだという。オプシオンは二日市温泉の「御前湯」入浴。びつくりしながらも皆大賛成。タオルは節子さん が準備している。公衆温泉のたつぷりしたお湯の中で ♪・菜の花畑に♪♪ ♪・春のうららに♪♪ を五人で歌い句会のメをする。誰も聞いていないとおもいきや、歌い終わるとお湯の中のおばあさんから拍手をいただく。気持ちの良い句会をありがとう。



天満宮・菖蒲池

客を呼ぶ楠落葉掃く手も止めず

聖子

人形のように動かぬ巫女薄暑

節子

人の声とぎれ青葉の音残り

光子

夢塚に天満宮の若葉風

由紀子

禅寺の午後風蘭に静まりて

真理子



光明禅寺・「一滴海庭」

## 第二十四回吟行記

平成十八年 六月八日(木)

参加者 聖子 節子 光子 真理子 由紀子

### 大村公園・新西海橋と嬉野温泉バスツアー

六月の花といえば紫陽花に花菖蒲。宮地獄神社や夜宮公園の花菖蒲、高塔山の紫陽花、直方の「大内菖蒲園」などが浮かんでくる。吟行地は同じ場所でも行く度に違う顔があるので、よく知っている場所でもかまわないが、初めての場所の感動は捨て難い。吟行地をどこにしようかと思いついていたところ、ふと目に留まったのが新聞広告のバスツアー。三十万本の花菖蒲観賞と書いている。その他大勢の人との集団行動や時間制約などで、句会ができるだろうかという不安はあるものの、やってみなければわからないバスツアー吟行。皆にメールで賛否を問うと、「OK」の返事。さっそく申し込む。「新西海橋と露天風呂と三大(海老・生うに・渡り蟹海鮮グルメ」と書かれたツアーの内容からみると、時間も価格も経済的だ。



六月八日八時四十五分博多駅筑紫口に集合、五十五分バス発車予定。光子・由紀子の北九州組は折尾駅に待ち合わせ、七時四十七分の特急に乗ろうと少し早めに折尾駅に着くが、事故による列車遅れの構内放送が繰り返されている。節子さんら参加者全員のチケットを持っているので一瞬ドキッとするが、下りの博多方面へは影響がなさそうだ。胸をなで下ろしながら特急に乗り込む。博多駅の集合場所では上り列車の遅れが影響し十五分遅れで全員集合となる。ぼつりと雨粒がおちはじめの中、四十名ほどの

客を乗せたバスが発車する。座席は決められていて、私たちは一番後ろの席に一列に座る。最初の目的地は長崎県大村市の「大村公園」。九州・長崎自動車道を南下し大村インターより大村市へと入る。

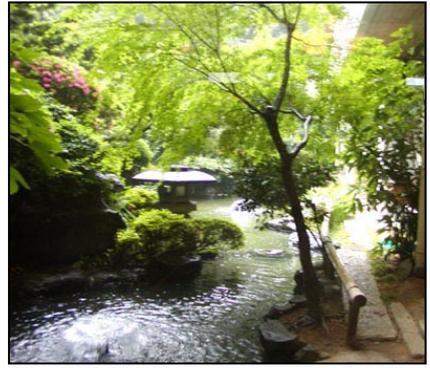
「大村公園」は城跡(玖島城)を公園として整備したもので、石垣が当時のまま残っており、桜や躑躅、藤、菖蒲、石楠花など四季折々の花が楽しめるようになっていいる。ここでの所要時間は五十分程。噴水のある池や葉桜の道を抜けると、外堀が花菖蒲で埋められている。一面の花菖蒲はちょうど見頃で、多くの観光客たちが庭内を散策している。江戸系、肥後



系の花菖蒲が多く、伊勢系の花菖蒲は小さくわずかに咲いている。立て札を見てしか分からない種類だが、熊本や明治神宮御苑などから移植された株は、十萬株三十萬本となって咲き誇っている。城跡と花菖蒲の取り合わせが美しい。



波静かな大村湾に面し、湾内の島が霧のような雨にうすくなっている。節子さん、光子さんは階段を上って櫓台へと行く。まだゆっくりと眺めていたいが、集合時間になったのでバスの方へと戻る。堀に架かった橋の下に黒っぽい魚が群れている。「鰯(ぼら)」だという。ぼつりぼつりだった雨も傘をさすほどに降り出す。これから嬉野方面に向かい昼食。伊勢海老、生ウニ、渡り蟹の豪華な会席料理とパンフレットに書かれてはいるものの期待せずにいたが、海老、蟹は小さめながら、まあまあ美味しく生ウニはたっぷり。しばらく生



ウニはいらないと思うくらい食べる。

昼食後、嬉野温泉「神泉閣」の露天風呂へ入浴。ツアー客全員が一度に入ると大変だろうと、少し時間をずらすことにする。フロントに荷物を預けてロビーで休憩。珈琲を飲みながら、小さな滝のおちる池と木々の緑が美しい庭を見る。私たちが最後の入浴客のようで、この旅館自慢の庭園露天風呂に三人貸切状態で入る。ただし節

子・聖子さんは早めに行動（入浴）。すぐにバスに乗り込み、次の目的地「新西海橋」へと向かう。

パンフレットに載っている花苜蒲・庭園露天風呂・新西海橋などの写真は見ていたけれど、大村（長崎県）・嬉野（佐賀県）・西海橋（長崎県）の地図が頭に入っていないので、どこをバスが走っているのかよくわからない。広がる青田や蓮田、自動車道からみる棚田、その向こうの海など、ワイワイ言いながら見たものの、「あちらがハウステンボスです」のガイドさんの声に、「さっきまで佐賀の嬉野いたのに今は長崎県、そういえばハウステンボスは大村湾に面していた」など頭の中は地名のみ浮かび、地図はぼんやりしている。長崎県全体の地図が描けない。

雨は本降りとなり、新緑の山並みも海も茫々としてよく見えない。その中にうつつすらと二本の高い煙突のようなものが見えてくる。「針尾の無線塔」。説明によると旧海軍の無線送信塔で、一九四一年ここから全連合艦隊に暗号電文



（ニイタカヤマノボレ）が発信され、真珠湾攻撃が開始されたという。戦後は佐世保海上保安部の施設として使用されたが、現在は全く使われていないらしい。海が見えてくる。土産店「魚魚（とと市場）」に到着。バスか

ら降りると、今通って来た赤い西海橋が見え、反対側に人道・車道二層の新西海橋が見える。新西海橋は今年の三月に開通したばかりという。車道は有料だが人道は無料で、希望者は歩いてみてくださいとのガイドさんの薦めもあり行くことにする。人道の中央部分には展望バルコニーがあり、床には下の渦潮が見えるように眺望窓が埋め込まれている。高所恐怖症の人は覗けないだろうと思うくらい遙か下に水面がある。大村湾の入口で、日本三大急流の一つであるこの西海橋の渦潮は有名であるが、降りしきる雨に渦がはつきりしない。先ほどの無線塔も灰色に霞んで見える。晴れていたら素晴らしい眺望であろうが雨は止みそうにない。（この日北部九州は梅雨入り）

総工費一億円のトイレがあるというので入ってみる。トイレは綺麗なほうがいいが、所有者は誰だろう。お土産店を一回りする。「魚魚市場」には長崎港から直送されてくる活伊勢海老やサザエ・蟹



などの魚介類、干物や蒲鉾などの加工品が所狭しと並べられている。味見しながらお土産を少し買う。バスに乗り込み、もう一軒お土産店に寄る。カステラの試食をしながら長崎県のお菓子や酒・焼酎を見てまわる。それぞれにお土産を買い帰路につく。博多駅には予定時間通り十九時すぎに着。近くのイタリア料理店にて夕食・句会。

はじめてのバスツアー吟行だったが、バスの中では常時ガイドさんがマイクで観光案内をするし、観光地ではいつも時間が気にかかる。どんな状況でも俳句をつくることができるといいが、もう少し集中できるほうがよいようだ。解散。

集合の時間気になる花菖蒲

節子

花がらを摘む菖蒲田に身を沈め

光子

さみだるる露天風呂あり人ひとり

聖子

西海の渦に降りこむ若葉雨

由紀子

わたり蟹縛られている生簀かな

真理子



西海橋と新西海橋 出典：「YOKATOKOBAY」 九州観光

# 番外編 吟行記

平成十八年 七月十五日（土）

## 博多祇園山笠（追い山）

去年の山笠吟行の後、節子さんから渡された一枚のCD「博多っ子純情」。チューリップの姫野達也の少し高い声のこの歌は、何故か遠い昔を思い出させ、博多はいいよと思わせる。

いつか君行くといいよ 博多には 夢がある

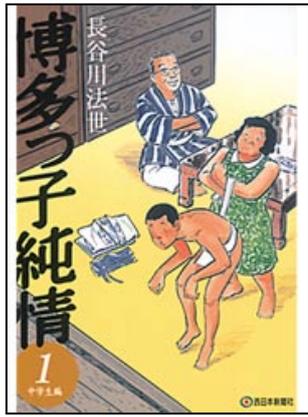
できるなら夏がいい 祭りは山笠

男達はとも見栄っ張り 張りで気が強い

海の風に吹かれるから

だけどもみんなすぐに貰い泣きするよな奴

酒を飲んで肩をたたく



み、法被姿の男衆の流れ昇きの勇壮な集団は男の粋を見せつける。「祭り  
は山笠」の歌詞に背き、胸に響く。



今年の追い山は土曜日早朝。まだ追い山を見たことのない主人は、目下博多の大濠寮に単身赴任中。追い山見物を夫婦するには曜日としては絶好の年である。これを逃してはならずと決行。余分な布団がないので、寮に近いビジネスホテルを取り、午前三時半にホテル前で待ち合わせ。タクシーで追い山会場まで行く。すでに交通規制が敷かれ、降ろされた場所は冷泉公園前。

午前四時前の公園には大勢の人が集まり、道路には各昇き山が櫛田神社の方向へ並んでいる。スタート地点（山留め）に八基の山笠が順番に並び、追い山の「櫛田入り」を待っているのだ。行き交う法被姿の昇き手の表情から緊張感が伝わってくる。公園前から見物客は皆歩道に上がり、少しでも会場の間で見ようと神社方向へと進む。一緒に進んだ方がいいが一番山笠の並ぶあたりで急に人の流れが止まり、全く前にも後ろにも動けなくなる。人の背中ばかりで昇き山が見えない。会場の回りは早くから場所取りをしている見物客がいっぱい。身動きがとれなく、このままでは暑い、見えない、帰れないの最悪状態になりそう。止む終えず通行規制のかかっている会場前の通りをすばやくかいくぐり、一つブロックの離れた通りへと回る。去年句友と泊まった「鹿島本館」の前を通って去年と同じ場所へ行く。ここも既に見物客で占められ前列には並べないが、神社の真正面、棧敷席や境内の清道旗が人の隙間から





辛うじて見える。穴場的な見物席だが、時間とともに後ろから人が詰めてくるので暑い。前後左右にいる人の汗の臭いを振り払うように扇子で扇ぐ。扇子や団扇は追い山の必要グッズといえる。

開始十分前のアナウンス。一番山笠の「恵比須流」の子供達が列をなして榎田入りする。拍手と歓声。見物客の声やテレビ中継のアナウンサーの声。それも五分前、三分前のアナウンスが聞こえる度に静かになる。三十秒前、二十秒前、十秒前とアナウンスされると人で埋まった神社前は、アナウンスのみが響くほど静まりかえる。午前四時五十九分。五、四、三、二、ドーンと太鼓の音とともに山笠の男達の怒涛の

ような叫び声。一斉に携帯カメラやデジカメの手が上がる。前にいる人達の頭の上を山笠が走る。清道旗を回ったのか、一瞬の静寂の後「博多祝い唄」が聞こえる。博多の男として生まれ、一番山笠のみに許される「祝いでた」の唄を「台上がり」として追い山で唄えることは最高の名譽らしい。見物客には、この場面に立ち会える一体感が何とも言えない感動を呼ぶ。

唄い終わるや、また走り出して第二清道旗の立つ「東長寺」へと向かう。会場はタイムを告げるアナウンスと拍手と歓声。五分おきに二番山笠、三番山笠と榎田入りのタイムレースが続く。追い山は、この「榎田入り」のタイムと、ここから「廻り止め」と呼ばれる山笠ゴール地点までの五キロのコースのタイムを競うわけだが、速さはどれだけ気持ち一つにして山



男たちがそのバケツを持ち「勢い水」と呼ばれる水で道路を濡らし、山笠を濡らし、昇き手を濡らす。熱くなった山笠を冷やす「勢い水」は安全のためにも無くてはならないものらしいが、祭りを一層勇壮なものにする。暗い空は次第に明るくなり鳥たちが飛び交う。

一つの山笠に昇き手を含めてどれだけ多くの人が走っているだろう。昇き手の交代要員、先走り、後押し、交通整理をする人たちが。それぞれに役割を持ち山笠を走らせる。背

中に「流れ」が書かれた水法被を着て、幼子は父親に抱えられ、小学生らしき子供達も必死な顔でひた走る。法被姿の女の子も走る。各通り、各筋から「オイサ、オイサ」のかけ声が聞こえてくる。通りという通りには、見物客が詰





め掛けている。追い山コースの地図を見ながら、走る山笠を見ながらゴール地点の「廻り止め」へと歩いていく。走り終えた人たちへの拍手と歓声。神事であるだけに統制がとれ、山笠に係わる人たちは皆真剣な眼差し。

すつかり空は明るくなり、最後の山笠がゴールしたのか、見物客もファーストフードの店に入ったり、地下鉄の駅へと向かっている。交通規制が解かれ、大通りに車がゆつくり走り出す。ほんの

一〜二時間前の熱い祭りは終わり、いつもの街に戻っていく。  
山笠小屋の横では、追い山を終えた男衆が長いテーブルを囲んで朝食を食べている。少し離れた所で、同じように子供達が法被姿のまま黙々と朝食を食べている。子供たちはこうやって大人の背中を見ながら育っていくのだらう。誇れるものを持つことはいい。そんな思いを抱かせるお祭りだ。とりあえず一眠りしようとして地下鉄に乗る。

いつか君行くといいよ 博多には 夢がある  
できるなら夏がいい 祭りは山笠



# 第二十五回吟行記

平成十八年 八月十日(木)

参加者 節子 聖子 由紀子

## 観世音寺(太宰府市)

今年の夏も暑い。例年より遅い梅雨明けではあったが、八月の太陽は容赦なく大地を照りつける。北部九州は雨も降らず30度越える猛暑が続いている。八月十日の吟行の日も三十五度。



少しの時間だけでも吟行をしようということで、太宰府の都府楼址横にある古刹「観世音寺」を訪れる。木立に囲まれた寺は、ひっそりとして蝉の音が響くのみ。車から降りると乾いた土や夏草の匂いがする。境内で何か仕事をしているのか、作業着の男が二三人動いている。炎天下の寺を訪れる人はほとんどいない。駐車場のすぐ横にある「宝殿」に入る。逃げ込むと言ったほうがいいかもしれない。

二階の展示室に入ると、重要文化財の像が十数体も並んでいる。平安時代(十世紀)から鎌倉時代(十三世紀)の作で、中央に展示されている「馬頭観世音菩薩立像」や「十一面観世音菩薩立像」などは高さ五メートルもあり、他に阿弥陀如来、地藏菩薩、大黒天、毘沙門天など



の立像や坐像が拝観する者を見下ろすように並んでいる。

像の数の多さと高さに圧倒されるが、それにも暑い。鉄筋コンクリートの講堂のような展示室は冷房が効いていなく扇風機も回っていない。重要文化財の巨像たちは涼しげに立っているが、見学する者は汗を拭きながらである。逃げ込むようにして入った「宝殿」だったが、ざっと見て出る。

太宰府観世音寺は、大宰府政庁の東側に天

智天皇が母斉明天皇の冥福を祈るために創建されたもので、七堂伽藍や戒壇院を備えた大寺院であったという。(創建時期ははっきりしていません、七世紀とするもの、八世紀とするものなどある)規模は奈良の東大寺に匹敵し、西日本随一の壮大さを誇るが、平安時代にはいつて再三の火災や台風をやめに創建当時の諸堂は悉く消失。現在残っている創建当時のものはわずかに梵鐘、諸堂の礎石、天平石臼、磚(せん)などである。大宰府政庁の権力の衰えとともに寺も衰退し、復興はされたが原型を留めていない。一時は廃寺同然の状況にも追い込まれたが、江戸時代藩主黒田家によって金堂、本堂が復興され古寺としての面目を保っている。ただ仏像は創建当時のものは残っていないものの、平安期(藤原時代)のものも多く残され、近代にはいつて修理が行われ現在に至っている。「宝蔵」の完成が昭和三十四年だから、それ以前は本堂などに安置されていたのだろう。これだけ多くの菩薩像な





どが一同に並ぶと、それぞれを美術品として鑑賞する。観音像の頭、顔、手足などの表情を見ていく。

外にでると「梵鐘」が見える。風雨にさらされたような案内板に大きく「国宝」と書かれ、梵鐘を囲む柱には金網が張り巡らされており、勝手に撞かないでくださいと注意書きがある。

京都妙心寺の鐘とともに日本最古のもの。菅原道真が失意の中で詠んだ七音律詩・不出門の一節に「観音寺只聴鐘声」とあるが、この鐘音がこの梵鐘のひびき。多くの文人たちもここで歌を詠んでいる。

手を当てる鐘は尊き冷たさに爪叩き聴くそのかそけきを

長塚 節

観世音寺ゆふべの鐘に花散れば身も世もあらず泣かまほしけれ

柳原 白蓮

壇一雄も観世音寺の境内や都府楼址など好きでよく歩いたと随筆に書いている。それには任職から、鐘を撞いて御覧なさいと言われ、鐘楼に登って二つ三つ梵鐘を鳴らし、この鐘の音を聞いたであろう上代の人々を回顧。大宰府政庁の相伴旅人、山上憶良、坂上郎女などを主題にした物語を書いてみたいと思ったという。歴史あるとはそういうエネルギーを生み出すものなのであろう。

鐘楼の石段を登り、梵鐘を間近に見る。張り巡らされた金網には空蟬がひっかかったままになっている。我々は（私だけかもしれないが）エネル



ギーを放出してしまったこの蟬の殻の如く境内にいます。創建当時の「天平石白」の案内板を見るが、感動もなく行き過ぎ、本堂や隣の戒壇院を見て回る。

少し寂れた寺の風情に歴史を感じながらも、ゆつくり偲ぶほどなく一回りして観世音寺を後にする。境内の横にコスモス畑がひろがっている。盆前なのに、もう花をつけている。花盛りとはいうには程遠く、二つ三分咲きのコスモスは、観世音寺の風情のようになどどこか侘しく心に残るものだった。

吟行の後は涼を求めて喫茶店に入り「宇治金時」を注文。大盛りのかき氷だったので、すっかり冷える。肩にタオルをかけたたりしながら句作。その後二日市温泉へと回り温泉にて汗を洗い流し、さっぱりとしたところで句会をする。

当日は春日市の春日公園で「あんどん祭り」開催日。夜店や花火大会があるらしく、毎年大勢の人が押し寄せるらしい。それを避けての吟行。温泉や食事などのんびりと出来てよかった。帰りの電車は春日駅まで親子連れや浴衣姿の女の子などで超満員。この人混みの中でなかったことにホッとしながら博多駅を過ぎ、折尾駅までうつらうつらしながら家路につく。

空蟬や観世音寺の梵鐘に 由紀子

かき氷両肩にバスタオルかけ 節子

浴衣の子今宵花火の駅で降り 聖子

## 第二十六回吟行記

平成十八年 九月十四日（木）

### 武蔵寺・天拝山山麓（筑紫野市）

参加者 聖子 節子 光子 真理子 由紀子

今月の吟行場所はどこだろう？「いつもの電車で大野城駅まできて下さい」のメールが届いたが、場所は未定。風まかせのミステリー句会らしい。テーマは「合衆国最大の州ようこそ森へ」という。遊び心いっぱい九州の2Sの試みに乗っかるのはいつも楽しみ。さっそく合衆国最大の州は？と世界地図やアメリカの地図を頭の中に浮かばせる。いつもは働かない頭を働かせる。テキサス、カリフォルニア、そうだアラスカがある。子供が使っていた中学校社会科地図を取り出して確認。やっぱりアラスカだ。ということ。「アラスカの森」がテーマ。まず食事処をおさえるはずだから、アラスカでは何を食べるのだろうか？大宰府あたりの「アラスカの森」とはどんな所だろう？など興味が膨らんでくる。

九月十四日 折尾九時十二分の快速電車に乗るために、いつものように折尾駅のプラットホームで光子さんと待ち合わせる。早めに着いて待っていたが、前駅から普通電車に乗って折尾駅で降りてくるはずの光子さんが降りてこない。電話が入り事故渋滞に巻き込まれていて間に合いそうにないという。電車にのるべきか、光子さんを待つべきかと迷ったが、予定通りの電車に一人乗り大野城へと向かう。後から特急で追いかけてくるだろうが、特急の止まらない大野城駅だから博多で乗り換え。連絡時間はいいだろうかと思いつつ、車窓から山や少し色づいた田んぼをぼんやりと見る。前の席では東南アジア系の三人が切符拝見の車掌に「切符を失くした」と言い張っている。待っていても一向に切符を探さず様子のない三人に、車

掌が長々と説明しながら料金を支払わせている。今日ほどどんな一日になるんだろう？もうミステリー吟行句会は始まっている。

待つ人の来ぬ汽車に乗るいわし雲

由紀子



は、高い木々に囲まれ小さく静かに建っている。山門をくぐれば小さな太鼓橋のかかった「心字池」。池の面には白色と淡いピンクの睡蓮の花がぼつんぼつんと咲いている。池に傾ぐ木の枝には、鮮やかな赤色の糸とんぼがとまって動かない。本堂は山を背に九州最古の寺の風格を漂わせ、境内にも木々の上の空にも心地よい風が吹いている。本堂手前の樹齢千三百年の「長者の藤」の葉は青々と藤棚を覆い、その先には竹蓋のしている古い井戸がある。法要の時に汲むらしい。

灯明の下にも昼の虫鳴いて

真理子

糸ほどの口紅の色糸とんぼ

節子

武蔵寺の結界朝の露にぬれ

光子

筆塚の金字の岩や秋草に

真理子

梨りんご芋売る露店寺脇に

光子



置かれている線香や蠟燭を灯し、大きな念珠をひく。どこからか虫の音が聞こえてくる。寺脇の径には金字でかかれた「筆塚」が露草や水引草などの秋草の中に埋もれるように小さくある。この辺りは道真公ゆかりのものが多いので、これもそうかもしれない。「紫藤の滝」や「衣掛岩」や、歌碑を見て歩く。武蔵寺や天拝山は以前にも書いたように菅原道真公に纏わる話が多く残されている。天

拝山へ登る径は「天神さまの径」と名付けられ、道真公の歌碑が起点、一合目、二合目、三合目という具合に十一箇所建てられている。それを見ながらハイカーたちは身近な山として登山を楽しんでいる。この日も年配の小グループが時折リュックを背に登っていく。

車に乗り込み、どこへ行くやらおまかせ組の三人は後ろの席。天拝山の山裾を周るように行くと、「森へようこそ アラスカ」の看板を見つめる。「これだっ!!」矢印に従って森の中に入って行く。虫の音や法師蟬の鳴く小道の先に湖が見えてくる。このところ雨が降っていないので水の量はかなり少なく、湖とも沼とも見えるが、奥に見える大きなログハウスとの



構図はアラスカ。こんな所にログハウスがあるなんて隠れ家みたい。湖に向かってテラスが張り出している。丸太を組んで造られているログレストラン。薄暗く灯りが灯されている店内の一番奥のテーブルに座る。静かな森の湖の上を蜻蛉が自由自在にたくさん飛び交っている。秋蝶も舞い、青鷺も佇んでいる。テラスに出てみると湖の匂いがある。このメニューの目玉はアラスカ直送のキングサーモンの一品。肉料理も美味しく、天井が高く広々とした店内に流れる音楽を聴きながらおしゃべりする。客は多からず、少なからず。秋風がすーっと流れていく。

山間の路地に虫なくレストラン

聖子

空席を抜ける秋風レストラン

節子

山芋か鳥瓜かと蔓をひく

由紀子

法師蟬つくつくつくくと鳴き終わり

聖子

森の小道を戻る。行くときよりも法師蟬の声がひびく。青栗、むかご、枯蟪蛄、空には縹雲。初秋の森を満喫して天拝山公園へと行く。観月会や能舞台にもなる水上ステージを通り、藤原虎磨のモニュメントのそばにある東屋（休憩所）で句会。



これからはオプション。二日市の温泉街を散策して温泉へ。ここは天然温泉に銭湯のように気軽に入れるのがいい。公衆浴場「御前湯」「博多湯」は向かい合うように建っていて外観は旅館か料亭のようだ。今回は「博多湯」を利用する。創業は百五十年ほど前だが、二年前に改装されている。小部屋を借りオプション句会などとして時間が経つのも忘れてしまう。どうなるのかと思ったミステリー句会は、俳句あってこそその楽しみを一段と高めたような句会で終わる。面白かったな。

飛行機の音秋天のどこからか

節子

湯の町の柳に秋の暮れ残る

真理子

作者当ての句会などして西鶴忌

光子



大丸別荘の前で4人おそろい？



「武蔵寺」の赤トンボ

## 第二十七回 吟行記

平成十八年 十月十二日(木)

参加者 聖子 節子 光子 真理子 由紀子

### 中津城・福沢諭吉旧居（中津市）

「若く明るい歌声に・・・」と歌いたくなる場所を、人は心のどこかに持っているのだろうか？中津城の天守閣から中津市の町並みや城の横を流れる山国川を見下ろした時、この曲のイントロが不意に浮かんできた。

中津は高校の三年間汽車通学で通った所。受験勉強を強いられた三年間だったので、楽しいことばかりではないが、青春の良き思い出として心の隅に残っている。現在も実姉が住んでいることもあり、時々立ち寄ることもある中津市は小さいながら城下町で、観光地としても見所のある場所なので、吟行地として「いつか行かない？」と提案していた。散策するのに良い季節ということで今回実現。



十月十二日特急「ソニック」にて中津へ。博多からは一時間二十分。高架された駅ではあるが、まだ自動改札ではなく女性駅員一人が切符を受け取る。駅前には散策用の自転車（観光協会所有）が無料で貸し出されているので、これを利用するのも一案だと思ったが、メンバーの「いまだ自転車に乗ったことがない！」の一言にすぐそこ案を取り下げる。タクシーに乗り中津城へ行く。

扇城（せんじょう）とも呼ばれる中津城は、山国川が周防灘に注ぐ河口近くに扇状に築かれた城で、海水が水門より入り潮の干満によ



って内堀の水が増減する日本三大水城（他に高松城・今治城）の一つという。久しぶりに句友と城の中に入る。

中津城は、黒田官兵衛孝高（如水）が豊臣秀吉の命により九州を平定し豊前十六万石を拝領して一五八八年築城。その後嫡子黒田長政の関が原合戦の軍功により黒田父子が筑前五十二万石の太守となったため、替わりに丹後田辺より細川忠興が入城。城の大修築を行い河口に向かって扇状に拡張する。戦国の名将二人によって築かれた城だが、忠興は領国支配に不便ということで小倉城を築城。一六三二年には肥後熊本へと移る。その後小笠原氏、奥平氏と続き、十万石の奥平氏九代（一五五五年間）の居城として明治維新を迎える。

廃藩置県で横を流れる山国川は福岡県と大分県を分ける川となったが、天守閣からの眺めはこじんまりとした町並みと穏やかな田園と広々とした周防灘。雲ひとつない空に水鳥の鳴き交わす声がひびく。色づきはじめて桜の木々や城の石垣や堀を見下ろしながら、一見文学少女風だが、作文を書くことが最も嫌いだっただ高校時代を思いだす。母校はこの山国川に沿ったところにある。

水城に流れ入りをり秋の潮 節子

水鳥の鳴き交わす濠城の秋 由紀子



公園として整備された城内は、「中津神社」「城井神社」「扇城神社」「奥平神社」など神社が多くあり、城の手前には福沢諭吉の「独立自尊」の大きな碑が建っている。大鳥居を出た所に「蓬萊観」という市民庭園がある。鄙びた入口から入っていく。

ここは明治時代京都の南座と全く同じ造りの劇場があり、名だたる歌舞伎役者が舞台を踏み、水谷八重子、長谷川一夫なども来演するなど戦前まで賑わったところだが、戦時中強制疎開により解体。跡地は現在庭園として市が管理している。建物の中はギャラリー喫茶で、高校時代の友人の書が飾られている。

十二時になったので、予約をいれている「筑紫亭」へと向かう。明治三十四年創業の老舗料亭の建物は登録有形文化財になっている。玄關脇の苔生した小庭の山頭火句碑を見ながら案内を待つ。通された部屋にも句碑と同じ山頭火の句の掛け軸が掛けられている。昭和五年ここで催された句会で山頭火がはじめて河豚を食べ詠んだ句という。

是が河豚かとたべてゐる

山頭火

料理は昼御膳で特に名物の鱧(要予約)を注文したわけではないが、この日は他に鱧の予約が入っていたのだろう。鱧のお造り。伊勢海老のお造りにも似た味で、小骨を全く感じさせない。京都の鱧料理が有名だが、山国川の肥沃な水が流れ込む中津(豊前海)の鱧が、昔から発達していた海運により二日で京都に運ばれ食されていたという。



以前より鱧は食べていたが、この鱧は確かに美味しい。食事の終わる頃、筑紫亭の女将が部屋に挨拶をと入ってこられた。六十五才は過ぎていると聞いていたが、着物のよく似合う女将の白い手は年を感じさせない。

昼御膳に女将の挨拶など有難いと、こちらも正座をして聞いていたが、鱧の話に始まり、筑紫亭の盛衰の苦労話から何とかの賞を頂いた話など次から次とよどみなく話される。一時間ばかり聞いていたのではないだろう

か。挨拶というより細腕繁盛記の講演会のように、筑紫亭を出たときにはぐったりと疲れてしまった。少し残念だったが、文化財にもなっている亭内を見学させていただけなかったこと。昼御膳の客だから仕方がないが・・・

料亭の裏の小窓や秋簾

聖子

筑紫亭をでるとすぐに寺町に入る。地名どおり沢山のお寺。その中でひと際目立つお寺がある。地元で「赤壁」というだけでわかる合元寺だ。黒田孝高(如水)がこの地を平定する時抵抗した豊前の豪族宇都宮氏の家臣達を討ち死にさせた寺で、その返り血が幾度塗り替えても浮き出てくるので白壁を赤く塗ったという。戦国時代の血生臭い話だが、今は観光のルートになっている。



境内に入ると「お願い地蔵」の前にたくさんのお馬が掛けられている。

豊前路の寺は静かに柿の秋 光子

赤壁の寺のいわれも花芒 真理子



大屋根の続く寺町を抜けて「福沢諭吉の旧居」に着くと、ちょうど二十年に一度という葺き替えの葺き替え中。五・六人の男たちが黙々と作業をしている。旧居や横の記念館（一万円札の一号券がある）の見学は割愛して、横の柿渋の匂う和傘工房へ行く。耶馬溪の竹を利用した和傘作りは下級武士の内職として盛んだったが、現在ここ一軒のみ伝統を守り続けている。

葺き替えの屋根に秋晴黙々と 節子

この路地を曲がれば旧居柿熟るる 由紀子

句会場は姉のギャラリー。古民家を改装して一階は創作料理のお店、二階は目下貸しギャラリーとなっている。急な階段を上ると薄暗い畳敷きの広い部屋とフロアリングの小部屋。草木染めの作品や絵画、皮工芸品が回りに置かれ、真ん中に広いテーブル。十句なんとか出句したものの中津や青春時代への思いが強すぎたのか、はたまた筑紫亭の女将に気を吸い取ら

れたのか疲れ気味。皆もそのようだ。「あしや句会」はゆつくり・のんびり・楽しくをモットーにしたい。中津駅から特急に乗り解散。



「独立自尊」の碑

合元寺の「お願い地蔵」



# 第二十八回 吟行記

平成十八年 十一月十四日 (火)

## 櫓山荘跡・夜宮公園 (北九州市 小倉・戸畑)



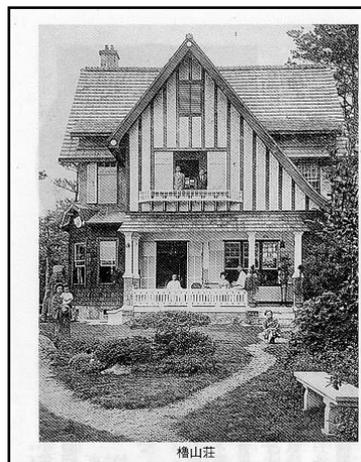
今月は皆の都合があわず「あしや句会」の吟行は取りやめ。机上ではなかなか句ができないので、友人を誘って以前から一度は行ってみたいと思っていた「櫓山荘跡」に出かけることにする。

「櫓山荘」(ろざんそう)は、俳人橋本多佳子が夫の豊次郎と大正九年から昭和四年までの九年間住んでいた家。JR鹿児島線の「九工大前」駅の近くにあるこんもりと樹木の茂った小山にその跡が残っている。現在は、中井北公園と番所跡緑地保全地区として開放され、平成十五年十月には櫓山荘と多佳子・久女の二人の女流俳人を記念して句碑が建てられている。

近年の俳句人口増加は目を見張るものがあるが、北九州もあちこちに俳句教室が開かれている。

句会の出席者の多くが女性で占められているが、大正・昭和初期の俳句界では女流俳人は一握りほど。その一人の杉田久女が北九州に住み、多くの名句を生み出してきたことはよく知られた話だが、橋本多佳子が、この北九州の櫓山荘で俳句と出会い、久女に手ほどきを受けたことはあまり知られていないのではないだろうか。

多佳子の夫・橋本豊次郎は、大阪で建築請負業「橋本組」を興し、難波



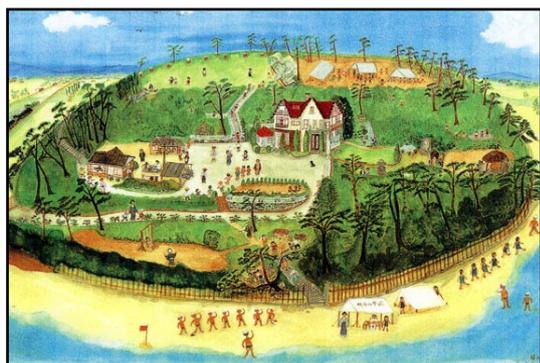
櫓山荘

九年北九州小倉に居を構える。それが「櫓山荘」で、豊次郎が英国の中産階級の家庭をイメージして設計したものだ。幕末に黒船監視の見張り番所が置かれていた櫓山(やぐらやま)に建てられた櫓山荘のすぐ下には響灘がひろがっていたという。

ユーカリの並木や小石を敷きつめた道、回遊式の庭園のある和洋折衷の三階建ての瀟洒な建物。テニスコートや野外ステージ、ステンドグラスの広い窓、バルコニー。大正時代の小倉にこのような山荘があったとは驚きだ。

夫婦の垢抜けたセンスが文化人や知名人を引き付けて、櫓山荘が当時の小倉の文化サロンになったという。他に戸畑では松本健次郎宅・現西日本工業倶楽部、八幡では製鐵の公餘クラブ・現高見倶楽部などが文化サロンとなる。

しかし「櫓山荘」は、昭和四年橋本夫婦が父・料左衛門の死去に伴い大阪に転居した後十年間別荘として使われたようだが、





豊次郎も昭和十二年には亡くなり、昭和十四年橋本家から手離されている。

多佳子と俳句との出会いは、大正十一年西海道俳吟旅行で小倉を訪れた虚子を迎えての句会。久女をはじめ地元の俳人たちが相談して「櫓山荘」での句会が実現する。

そこでの兼題は「潮干狩り」「落椿」。櫓山荘には三月のまだ少し寒い潮風が吹きつけ、暖炉にはもてなしの火がたかかっている。暖炉の上の花瓶に活けられた深紅の一輪の椿が絨毯にこぼれる。それを二十三才の多佳子がそつとひろって暖炉に投げ入れる。虚子はその瞬間をとらえて詠む。

『落椿投げて暖炉の火の上に 虚子』

美しい一句が生れ、感動した多佳子が俳句に興味を示す。その日初対面だった久女に、豊次郎の勧めで多佳子は俳句の手ほどきを受けるようになる。

『裏門の石段しづむ秋の潮 多佳子』

『窓の海今日も荒れゐる暖炉かな 多佳子』

早朝よりの雨が止み、少し薄日が射し始めたJR鹿児島線の「九工大前」駅よりタクシーに乗り、狭い路地を抜けて公園前で降りる。公園というより木々に囲まれた広場で、一番奥に「櫓山荘跡」と書かれた句碑がぼつんと建っている。句碑の前には茶色の石が平面的に敷き詰められ、そこに「玄関」「応接室」「台所」などと書かれている。小山に上る石段や野外ステー



ジ跡の石段が当時を偲ばせるが、白い手すりは、明らかに最近後付けされたように新しい。小山から見る海は遠くにあり、北九州の工場地帯が見えるばかりだ。

すぐ横を走る一九九号線を何度通ったことか。狭くこんもりとした藪のような所が「櫓山荘跡」だとは夢にも思わなかった。薄暗い小山に佇むと、「夏草や兵どもが夢の跡」の句が浮かんでくる。ヒヨドリやカラスの鳴く声を後ろに聞きながら石段を下りると、尉鷗が姿を現す。所々に咲く石菫の花に何かホツとする。碑があるだけで何もない所とは聞いていたものの、碑と名残りの石段だけの広場は、冬雲の空には寂しい。

中井北公園を後にし、同じ頃戸畑の文化サロンだった「西日本工業倶楽部」の近くにある「夜宮公園」へと行く。明治学園前でタクシーを下り、湧き水のある溪谷へと下りていく。節子さん、温子さんに連れてきてもらったことを思い出す。

今年の紅葉は遅く、楓はまだまだ緑色で、菖蒲田の葉も少し枯れてはいるが青々としている。所々わずかに色づきはじめている木々が揺れる。菖蒲田を前にして東屋で休むと、木の実がころころと屋根伝いに落ちてくる。時折風が強く吹き、その度に木の葉が舞う。公園の向こうに見える美味しい珈琲店はまだ健在だ。時雨雲は去り、やわらかい冬日の公園は犬の散歩する人や買い物帰りの人





が通り抜けていく。

「櫓山荘」「夜宮公園」の吟行はいつものような吟行句会ではなかったが、この吟行を通して女流俳人の先駆者ともいえる多佳子の俳句の出発地点が東京でも大阪でもなく、この北九州だったことを知り、また「文化不毛の地」といわれてきた北九州にもいくつか文化サロンがあり、多くの文化人が集まっていたことを知る。

櫓山荘跡の石碑や小鳥来る

由紀子

時折の風時折に降る紅葉

由紀子

冬めける珈琲店に入ろうか

由紀子

〈参考〉

橋本多佳子は、大阪帝塚山に転居した昭和四年「ホトトギス」四〇〇号記念俳句大会が大阪であり、出席した久女によって山口誓子に紹介される。その後昭和十年一月より誓子に師事。「ホトトギス」を離脱。昭和十一年久女「ホトトギス」除籍。



西日本工業倶楽部  
(旧松本邸)



新築された頃の櫓山荘 (大正9年頃)

# 第二十九回吟行記

平成十八年 十二月七日(木)

参加者 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

## 友泉亭公園・植物園 (福岡市)

前日の小春日和から一転、朝から小雨が降っている。天気予報通りだが、ちよつと恨めしい気持ちで空を仰ぐ。今年最後の忘年句会は福岡市内の「友泉亭公園」と「福岡市植物園」を吟行予定。

いつもの快速電車に乗って光子さんと南福岡駅に着くと、節子さん・聖子さんが車で待っている。すぐに城南区にある「友泉亭公園」へと向かう。公園の入口近くで真理子さんが手を振っている。市内の渋滞も考えられるので、十時半から十一時くらいまでに集合ということになっていたが、ちょうど十一時頃到着。福岡市在住の真理子さんは、自分の車で先に着いている。全員集合。



樋井川に沿った道沿いに公園の入口と車が何台か止められる駐車場がある。車を降りるとすぐに真理子さんが手招きをする。横の樋井川に鳥がいるという。橋から身を乗り出すように見ると、水量の少なくなつた川の石の上に一羽の鳥がいる。鳩よりも大きいその鳥は橋の上の五人の目や声に動じることなく、じつと一点を見つめて立っている。雪が降るほどの寒さではないものの、冬の雨に打たれながら何故川の中に立っているの?と問いたくなる。黄色の足先が寒々しい。「五位鷹」(ゴイサギ)ではないかという。

ゴイサギの足の黄色や水涸れて

光子

入口に「静」の一文冬紅葉

由紀子



しばらく見てから「友泉亭公園」の冠木門を潜る。雨に濡れた冬紅葉が真っ先に目に入る。その赤い紅葉の散つた路の先に「友泉亭」がある。中でお抹茶がいただけるといふので券を購入。「友泉亭」は、一七五四年筑前黒田家六代藩主継高公が設けた別荘で、約三〇〇〇坪の庭園にはシイ、マキ、ツバキなどの古木が残されており、樋井川の流れを引き入れたといわれる池泉には錦鯉がたくさん泳いでいる。当時そのたずまいは黒田家の家風を反映して、質素、堅実、実用的なものだったようで、明治維新後、小学校や役場として利用されたという。その後家屋の解体や売却など幾度かの変遷があり、現存の建物は昭和初期、貝島家(石炭王)によって新しく建てられたものだが、それはそれで貴重なものである。さらに昭和五十年代に福岡市が買取り、公園として整備されたという。庭園の大まかな構図、構成、植生などは当時とたいした変わりはないようで、本館の大広間や、新たに作られた茶室などは、茶会やその他の文化活動に利用されている。



大広間に座り庭園を眺める。雨の庭園は風情があるとしみじみ思う。私事



いる。真っ白な山茶花が一際美しい。

ながら娘が近くに住んでいたの、春と秋に訪れたことがあるが、その時とはまた別の趣きがある。池に降る雨は小さな水輪をいくつも作り、赤い紅葉は透けて見える。静寂。カーボンヒーターの赤々とした灯りに皆集まり、菓子付きのお抹茶をいただく。鯉の餌も売っていて、皆で少しずつ池に投げ込む。少し体が暖まったところで庭園を散策する。街騒を遠ざける周りの木立に沿って茶室や野点広場・藤棚・溪流・滝・四阿などが配されて

音たてて餌に群がる冬の鯉 節子

張り付きし紅葉の一枚傘に透け 節子

山茶花の白の順路に沿ふて行き 光子

二・三枚紅葉前行く傘にかな 光子

冬花芽かくもか細き馬酔木かな 真理子

篠垣の潰え山茶花咲きこぼれ 真理子

昼食は「福岡山の上ホテル」。友泉亭公園から車で十分弱の距離で、次の吟行地「福岡市植物園」のすぐ近くにある。ホテルの駐車場からは市街地が一望。ヤフードームや福岡タワー、志賀島がぼんやり見える。雨雲が垂れこめて博多湾は灰色だ。名前の如く山の上にあり、眺望のすばらしいこのホテルが民事再生法を申請したとニュースにでていたが、失くなるのは惜しい。



車で植物園に移動。さすがに冬の雨が降り続く植物園には人影がない。広々とした園内の木々の幹は黒々として、いつもの冬の趣がする。噴水も勢いがなくモコモコと湧くように上がる。色とりどりのパンジーの花壇や薔薇園を見て温室に入る。温室には珍しい花木がたくさんあるのでゆっくり見て回る。中でも印象に残ったのが「旅人の木」

という名前の植物。別名扇芭蕉。葉柄に穴を開けると水が出てきて旅人の喉を潤し、日照を好み葉が南方向に向くように東西に葉が開くので、方向がわかるといふことで名付けられたという。(後でこの木が観葉植物として人気があり、売られていると知る。)

時間を忘れるほどの花や木。プーゲンピリアの咲きあふれる休憩室でなんとか句作。温室の透明の屋根や窓ガラスに雨が流れ落ちる。



「旅人の木」とありし木に時雨避け 由紀子

雨音を遠くに室の花あふれ 由紀子

室咲きのブーゲンビリア咲く下に 節子

温室のガラス流るる冬の雨 節子

見上げればパイパイに実や冬ぬくし 真理子

温室をでて園内の喫茶店で句会を始めるが、閉園時間が迫り清記のみ。温かい珈琲紅茶で一息つき、閉園放送を聞きながら出口に向かう。降っていた雨は止み、黄昏時の園をすっぽりと霧が覆っている。ほとんど人のいない雨の植物園だったが、花や木々の持つ温かみや句友との吟行が寂しさを感じさせない。

時雨来てやみながら又時雨行く 聖子

靴の奥まで冬雨の滲みにけり 聖子

一木の長きベンチや冬の雨 真理子

一枚の葉も残さずに大冬木 由紀子

冬の霧湧ききて苑をつつみけり 光子



冬紅葉の友泉亭公園

今日は東京でも句会があり、時々互いに写メールを送る。東京の楽しそうな様子が瞬時に分かる。距離を感じさせない便利な文明の利器。まだ使っていないので、保存しておいたはずの写真がないなどモタモタしてしまっただが、面白い。だがこちらはまだ句会が済んでいない。山の上ホテルに戻り、広々としたロビーの休憩所で句会の続きをする。十句出句。忘年句会には、やっぱり温泉。ホテルの大浴場はアルカリ天然水を沸かしたのだが、すべすべとして気持ちがいい。皆お酒は飲まないのに、ほんのりと桜色。年忘れ！年忘れ！またよい年になりますように！！解散。

自薦句

(一〇十三)

自薦句 一

平成十六年十月 北九州市八幡西区 瀬板の森



なおみどり残して桜紅葉かな  
木の橋を渡りしよりの木の実径  
藪虱とんがり屋根の小屋見つけ

由紀子

こおろぎの音の二つのづれ始め  
原っぱに遊び惚けて藪虱  
さざなみの立つ池の端冬近し

節子

冬近しさざなみ立てて風の道  
山緑溶かした色の秋の水  
捕らわれしクマの体の草じらみ

光子

名月は古き瓦を煌めかせ  
虫の音に近づけば又遠くなり  
草虱ひつつく野原今はなし

聖子

平成十六年十一月 北九州市若松区 高塔山 若松港



見覚えのある人おりし十夜寺  
小さき窓横切る冬の貨物船  
打楽器のように時折常鶴

節子

寝転んで犬も一緒の日向ぼこ  
一茶忌や小さき子らの歌聞こゆ  
時雨れても鈍色の月出しかな

聖子

信号所冬の入り江の高台に  
セメントを積む船行きし冬の海  
すべきこと一日延ばし木の葉髪

光子

湖風に吹かれるがまま末枯るる  
古里の空をゆらして芋の露  
初時雨灣に小さき弁財天

由紀子

## 自薦句 二

平成十六年十二月（筑紫野市 二日市温泉）



一陣の風一陣の散る紅葉  
箒目に歩幅小さき冬の鳥  
虎落笛厳しき時もありし父

節子

僧院の石階段に冬の月  
騙し絵の窓北風に曝されて  
変わらざるものとはなく年の暮

聖子

口伝え遠野民話や虎落笛  
母の手の自在に動き毛糸編む  
初雪に緊張と安堵混じりおり

光子

池の面の何も動かぬ寒さかな  
集会はまだ始まらず虎落笛  
つれづれに句会などして堀炬燵

由紀子

平成十七年一月（宗像大社）



雷鳴のとどろきわたる年の明け  
冬の田のあちらこちらにどんどの火  
新婚を手荒く祝う寒祭事

聖子

や、ありてふいに潜りし鳩  
末の子がとれば拍手の歌がるた  
さばかれし鮫鱧のただだらしなく

節子

龍の玉ほどの秘密をひとつ持ち  
故郷は荒れて無言や雪しまく  
初詣愛しぬくこと吉とでて

光子

日の暮るるほどに大きく冬の波  
雪しまく海に暮れゆく朱鳥の碑  
飛び石の歩幅よかりし龍の玉

由紀子

自薦句 三

平成十七年二月 (太宰府天満宮)



「平成十七年三月投句」より



山容を阿蘇の焼山大きくし  
日脚伸ぶ引き出しひとつずつ整理  
境内に古き絵馬堂梅三分

光子

春雪が枝の雫となって昼  
生け花の花材の一枝挿木する  
つながらぬ地震の電話春寒し

由紀子

山焼きの日時湯宿の掲示板  
下萌に靴お揃いの三姉妹  
けんけんぱしている姉妹草青む

由紀子

土人形紙人形も雛の段  
北国の沼なり遅き蘆の角  
正面に海を見据えて椿咲く

光子

有明の海をかなたに雪残る  
木の影のまだやさしかり春の庭  
湯上りの地獄めぐりや春浅し

節子

水仙の花打ちしだき春嵐  
夢の路往きつ戻りつ春の朝  
地震今も揺れて香るや沈丁花

聖子

猫の恋幾度走るや迷い道  
白魚を一夜生かして眺めけり  
なやらいに心の鬼は如何せん

聖子

挿木して待つとということ覚えけり  
箒目のしっとり濡れて春の雨  
白波を消して湾内春の海

節子

## 自薦句 四

「平成十七年四月投句」より

指先の荒れを茶摘女はにかんで  
六歳の恋占いや草若葉  
ひとひらの花のゆくえをみとどけて

光子



行き先を決めかねている花一片  
この部屋に確かに一匹春の蠅  
花菰のまわりきれいに刈りとられ

節子

春愁に化粧もせずや薄き眉  
まだ次の春ある我と思えども  
茹で水の色みどり濃き土筆かな

聖子

行く人の皆仰ぎたる落花かな  
自転車も砂場の子等も花の中  
ベビーカー降りて歩く兎草若葉

由紀子

「平成十七年五月投句」より

野あざみのいかにも多し山の道  
夏風邪の友と二人のハーブティー  
仄暗くして入る昼の菖蒲の湯

聖子

夏めいてもつれしままのネックレス  
小さき地震ありて突然電も降り  
護岸より下りる石段夏潮に

節子

保存樹の大木なりし藤の房  
レトロ館昼を灯して夏の潮  
灯台に広がる灘の大霞

由紀子

藤棚のこぼす光の中において  
窓をあけ夏めく海の風入れて  
大時計振り子ゆっくり夏の午後

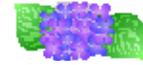
光子



# 自薦句 五

「平成十七年六月投句」より

あつち向きこつち向き沼蛙  
目の前に突然蜘蛛の降りて来し  
一心に小さき枇杷剥く小さな手



節子

「平成十七年七月投句」より

市街より遠き病院青田風  
一年や夏炉のロジなつかしく  
追い山の熱気や空に茜さす



由紀子

急ぎ来し我を阻みし蜘蛛の糸  
緑陰や大注連縄の宮深く  
八宮の山気満ちたる額の花

由紀子

町中に青田一枚残されて  
山小屋に夏炉のはぜる音のして  
締込みをきつく祭の男かな

光子

菖蒲田に御被太鼓響き来る  
抹茶で買って忘れし梅雨の傘  
たった一日使わぬ竿に蜘蛛のはや

光子

遊ぶ子を眺める鴉夏木立  
青芒小山の如く群生し  
ナイターの灯の煌々と夜蟬鳴く

聖子

緑陰の公衆電話や、不気味  
今年竹伸びるがままに基地の夏  
夏風邪の女事務員髪乱れ

聖子

炎天の道を犬ゆく爪の音  
片陰を歩けば頭一つ出て  
祭果つ若者詰所繩解かれ

節子

## 自薦句 六

「平成十七年八月投句」より

送り火にかがみて言葉少なかり  
サングラス自慢げにかけ港町  
渦という水のうねりや秋の潮

光子



小部屋にて天井低き残暑かな  
橋下に住む人ありて赤とんぼ  
古き家の軒に迫りし芭蕉の葉

聖子

もう少し鶺鴒の町に住むことに  
口広き花器に鬼灯ばかり入れ  
訪ね行く庭に芭蕉のある家を

節子

サングラス手にし船上レストラン  
夏暮れし門司港ホテルベルボーイ  
寺裏にあるはず蛇口芭蕉林

由紀子

「平成十七年九月投句」より

人波にのまれ押されて秋祭り  
荒びたる月の光の紫苑かな  
風の盆艶なる唄は身に沁みて

聖子



一本に紫苑の花の多きこと  
生姜売る露店の女薄化粧  
慎重に進む山道野分後

節子

砂袋並ぶ路地裏野分あと  
大川に浴ひし家々野分あと  
たまに会うことほどよけれ月高し

由紀子

言えば済む話紫苑に風の来て  
台風のきなかの旅となりにつけり  
台風のホテルの部屋の広すぎて

光子

# 自薦句 七

「平成十七年十月投句」より



背をむけて取ってもらいたいのか  
刈られる木賊乾ける音のして  
猿酒を作ることなく園の猿

節子

木賊刈り終えし庭師の深吐息  
猿酒もでそうな社の大樹かな  
新蕎麦の湯気たち上がる峠茶屋

由紀子

趣を越えて伸びたる木賊刈る  
木賊刈る思はぬところ伸び来たり  
秋山のリフト時々動きけり

光子

落ちてゐる銀杏多き野辺送り  
猿酒を造れるほどの森もなく  
秋日和忘れ置かれしボールあり

聖子

「平成十七年十一月投句」より



山門に水音のして冬木立  
六地藏少しぬらして初時雨  
花博の閉幕間近か落葉舞う

由紀子

量り売り新酒もありし出湯の町  
冬月の満ちゆく日々や旅果てて  
沢音もひそか初冬の観世音

光子

小春日やバス待つ人と立ち話  
時雨虹一人見つけし友ありて  
大根の葉の見事さについて見惚れ

聖子

舞ながらまた増えてきて鷹渡る  
凧らずも鷹の渡りといふに会へ  
ここにまたいのしし穴を掘りあたり

節子

自薦句 八

「平成十七年十二月投句」より

自転車も上がりたるとか池普請  
冬の水浮葉の色をにじませて  
母よりの荷に二束の干菜あり

光子



冬山の麓の寺や猫多し  
神社池小さけれども池普請  
何事もなさざる身にも年の暮

聖子

時に足少し動かし浮寝鳥  
この猫も少々太め冬の町  
湯の宿のまず手焙りに迎えられ

節子

冬帽を脱いでいつもの笑顔かな  
池普請するかたわらに鯉売られ  
一樹より群れて飛び立つ冬の鳥

由紀子

「平成十八年一月投句」より

小太りの婦人立ちたる社会鍋  
去年今年雪の降り止むこともなく  
札納本年よりは有料と

聖子



着ぶくれが着ぶくれ支え散歩かな  
目玉のみ動かし金魚の寝正月  
目に前に気に入り札歌がるた

節子

電飾を巻かれし木々の冬芽かな  
城を背に写す家族や着膨れて  
言うほどの夢はなけれど去年今年

由紀子

また一つ言葉を知りて去年今年  
水潤れし堀たゞありし城の址  
歩きゆくうちに冬雲少し出て

光子

# 自薦句 九

「平成十八年二月投句」より

石段の奥宮までの春時雨  
我が心映して春の水鏡  
のら猫の恋町じゅうに知れわたり

節子



絵踏の世白きヴェールに祈り継ぐ  
うちつゞく鳥居に春の雨の降る  
フルートに眠り誘はれ浅き春

光子

寿ぎの朝春光の空を仰ぐ  
祝杯の輪に加わりぬ春灯  
湯の町の芸妓らも来て午祭り

由紀子

指程の稚鯉群れたる春浅し  
位命婦白狐の社山椿  
アロマ油を滴らす浴槽春の宵

聖子

「平成十八年三月投句」より

まんまるなお顔よ姫の古雛  
錦織る機の絹糸春浅し  
一色ずつ絹通す機春の雨

光子



雛まつり葵御紋の人形も  
桃の絵の色鍋島も雛祭り  
今日は犬吠えぬ屋敷の花ミモザ

由紀子

白魚に一点黒き眼あり  
春塵をはずめて雨の町静か  
曲水の宴に異国の姫も居て

聖子

容赦なくポキンと折られアスパラガス  
人ごみをはづれ湯布院末黒野に  
柔らかき影の泳ぎや春の川

節子

# 自薦句 十

「平成十八年四月投句」より



笑い声春風にのり青空へ  
公園の皆春光につつまれる  
荒々と残花を散らす灘の風

由紀子

野っばらででんぐり返り春の風  
亀の声リクエストする春の寄席  
騙されて何故か愉しき四月馬鹿

聖子

花屑をつけて夫婦の歩みかな  
飛込みし部屋の広さや熊ん蜂  
押しボタン押さぬま、待つ町は春

節子

江戸からの駄菓子屋一軒風車  
エイプリルフルフル句作の家買ふと  
桜より吹きくる風を草に寝て

光子

「平成十八年五月投句」より



声明に藤の香流れ来たりけり  
えご散るや白き花びらかたきまま  
回廊に並ぶ五人に若葉風

光子

母の日やその日に逝きし友のこと  
竹の秋風吹くままに右左  
幸せの記憶に似たるそらびかな

聖子

祭りかと疑う人出博多かな  
辿り着く山間の村鯉のぼり  
卯浪立つ僧の献笛始まりし

節子

湖風の中の東屋燕の巢  
梅の実を散らし筑紫の古香庵  
合併に変わらぬ村の祭りかな

由紀子

# 自薦句 十一

「平成十八年六月投句」より

子鳥の羽か小さき羽落ちて  
梅雨入りの日窓打つ雨の乱調子  
かつて見し一直線に泳ぐ蛇

聖子



「平成十八年七月投句」より

石仏の顔は茂りの中にあり  
かわせみの一直線に去り行きし  
青田中ステンドグラス美術館

節子



抜かれゆくかたばみ種を飛ばしつつ  
県境の尾根ひっそりと蟻の道  
一行と別れ一人の額の花

節子

夏霧や由布全景を見せぬまま  
旅に来てめだかの川に手を浸し  
梅雨出水跡らし橋に泥の草

由紀子

石垣に逃げし蛇又出て小さ  
金屏風背に大振りの花菖蒲  
庭掃除する頃いつもの時鳥

由紀子

かわせみの翡翠低きを飛びゆけり  
紫陽花の辻を人力車夫駆けて  
卵浪立つ僧の献笛始まりし

光子

梅雨入りの日となりそうな雨降りて  
梅雨に入る棚田は海にひらけたり  
夏潮に西海橋の高々と

光子

山荘の夏炉の石の冷たかり  
海の底水母ばかりという話  
梅千の笹に茶房のジャズ流れ

聖子

## 自薦句 十二

「平成十八年八月投句」より

白蓮の闇に浮かびし野外劇  
送り火の燃え尽きるまで見ておりぬ  
花茗荷匂いたる庭母の庭

聖子



「平成十八年九月投句」より

一角は秋草の野に里の寺  
一字一石経塔に射す秋日かな  
倒木を結界として秋の寺

光子



閉じし目になほ稻妻の走りをり  
仏像の並ぶ残暑の宝殿に  
蟬の殻立ち入り禁止の金網に

節子

法師蟬つくつくつくと鳴き終わり  
西鶴忌シネマの中の浪花かな  
風の秋少年の声パフェが好き

聖子

訪ふ人の少なき寺や百日紅  
窓越しに虹の片端見てをりぬ  
ビルの間に夏の満月重たげに

由紀子

空席を抜ける秋風レストラン  
虫小鳥ゆったり飛び交う秋の沼  
三匹はやがて二匹に秋の蝶

節子

ただ同じ時を過ごしに帰省かな  
育てきし花を手折りて初盆に  
稻妻や身の丈に庭小さくして

光子

秋の蝶水煙にふれまた森へ  
古井戸の桶に水あり浮く落葉  
沼に日のかげりつくづくぼうしかな

由紀子

# 自薦句 十三

「平成十八年十月投句」より

落ちてゆくものばかり見て秋の暮  
今日も又一つの別れ秋の暮  
落ち葉踏む乾きし音で落ち葉踏む

聖子



水城に流れ入りをり秋の潮  
辻ごとに変わる町名秋城下  
稲雀群がる一樹けたたまし

節子

水鳥の鳴き交わす濠城の秋  
柿熟るる庫裏にのそりと猫の入る  
落葉降る昼は夏日という日にも

由紀子

イヤリング片方だけにして紅葉  
秋深し語るその手の美しき  
なれそめを無理にいわせて秋日和

光子

「平成十八年十一月投句」より

博多湾望む神社も神の留守  
大根の抜かれて穴のあるばかり  
念仏に浸りきったる十夜かな

節子

校門に並ぶ落ち葉の大袋  
玄海の沖より時雨来たりけり  
温め酒丹波但馬の旅話

由紀子

絵馬少し風に乱れて神の留守  
椀果てて戻りし部屋の冬めきて  
石踏の花その黄ばかりの庭なりし

光子

お十夜に乗り継いで行く遠き寺  
小春日を求めて犬の昼寝かな  
初冬や肩ふれそうに二人連れ

聖子



## あとがき

昨年、「あしや句会」「響風」第一号の編集を担当させて戴きましたが、早いもので一年が経ち、ホームページ（以下HP）掲載も平成十六年十一月に開設以来、二年を超えました。

このHP掲載が「あしや句会」の皆様にお役に立てたか否か定かではありませんが、HP担当の趣味で、掲載内容のプレゼンテーションや、HPトップページデザイン等へ多少の変化を加え、閲覧される方々の興味を引くよう努めるのが役割と割り切り、運営させて戴いています。

今回、『響風』第二号の編集にあたりましては、第一号編集時以降の「あしや句会」の足跡として、「吟行記」に加え毎月掲載している「自薦句」の編集も筆者に勧め、冊子ボリウムとして、五十頁くらいが適量と（勝手に）判断した結果、構成として「吟行記」「自薦句」の二部構成と致しました。

本冊子の原稿であるHP「Hibiki Winds」掲載においては、「あしや句会」の活動という内容（コンテンツ）があればこそ掲載価値が継続できています。

今後とも「あしや句会」皆様の吟行句会や懇親を中心とした活動を、息切れしない程度のペースで末永く継続され、より充実したコンテンツ提供をひたすら期待申し上げます、編集後記と致します。

ホームページ・編集担当



響 風 - Hibiki Winds -

あしや句会 第2号

平成19年2月発行

発行人：江本 由紀子